

津軽藩発祥の地・日本海運の拠点として栄えた鯨ヶ沢町の史跡を巡る



【白八幡宮】

大同2年(807)坂上田村麻呂創祀、康元元年(1256)鎌倉幕府執権北条時頼再建と伝えられます。慶長8年(1603)津軽為信が再建、鯨ヶ沢の総鎮守としました。以降、歴代藩主の崇敬を集め、弘前八幡宮・浪岡八幡宮とともに津軽三八幡宮の1つに数えられました。

出羽、北陸、大坂方面の船問屋や地元の豪商などが商売繁盛と海運の安全を願って、玉垣(北前船により西日本から運ばれた御影石で建立)や船絵馬(大阪の絵馬師による製作)を奉納するなど、商人や地域住民の厚い信仰を集めたゆかりの場所として知られています。

大祭は340年以上の歴史がある祭りで、藩政時代に藩の御用港として栄えた当時の鯨ヶ沢の面影を残す古式ゆかしい伝統行事であり、「津軽の京まつり」と称されます。御神輿渡御行列は町の無形民俗文化財に指定されています。現在は4年毎に開催されています。



【白八幡宮大祭】



【御影石で作られた玉垣】



【絵馬群】



【町奉行所・御仮屋跡】

鯨ヶ沢湊に出入りする船や荷物などを管理する町奉行所ならびに藩主巡行の際の宿泊所である御仮屋跡。鯨ヶ沢町中心部に位置します。ここには町奉行2名ほか配置されていました。



【菩薩坐像(円空仏)】

曹洞宗延寿院蔵。西海岸に唯一所在する円空仏。寛文2年(1662)に鯨ヶ沢沖で漁網にかかったものと伝えられ、「海上漂流黒本尊」とも称されますが、三厩義経寺像や蓬田正法院像など、津軽半島諸像とほぼ同時期、寛文7年(1667)頃の制作と推定されています。



【資料館「光信公の館」】



【光信公銅像】

【種里城跡】

赤石川左岸の丘陵に立地する中世城館。延徳3年(1491)津軽藩の始祖、大浦(南部)光信が岩手県久慈市から入ったとされます。巨大な堀跡に囲まれた主郭を中心に、その外側には寺院跡・侍屋敷跡と伝えられる平場や、光信の「御廟所」があります。発掘調査により、戦国時代の掘立柱建物跡・井戸跡、陶磁器・銭貨などが見つかり、光信居城の実像が明らかとなりました。平成14年(2002)「津軽氏城跡」の一つとして国史跡に指定されています。

【種里八幡宮】

大永3年(1523)大浦光信が、種里城の鎮守として創祀したとされます。光信家臣だった奈良家が今も代々宮司を務めています。

社宝の身正体や津軽為信が寄進したと伝えられる獅子頭、弓具、棟札などが現存します。また、境内には杉の大木があり、神社創建の頃に植えたものと伝えられます。これらは町の文化財に指定されています。



【杉】



【棟札】



【獅子頭】

写真提供：鯨ヶ沢町教育委員会
出典：鯨ヶ沢町 HP <http://www.town.ajigasawa.lg.jp>
白八幡宮大祭 <http://www.town.ajigasawa.lg.jp/taisai/>
光信公の館 <http://www.town.ajigasawa.lg.jp/mitsunobu/>